

オッピドゥムはガリアからポヘミアのケルト人居住地域に広く点在しているが、これらの都市的な社会の形成に寄与したのが、「移動からの帰還者」の存在である。

異郷の地に押し入ったケルト人たちのいきさつは、ポンペイウス・トログスやポリュビオス、リウイウスなどによって（多少の誇張とともに）記録されている。それらを要約すると次のようになる¹。新しい居住地を求め故郷を出たケルト人の「30万人の」集団のうち、一部はイタリア半島のポー川流域に住み着いた。紀元前390年ないし387年にローマ市を蹂躪し、紀元前225年にテラモンの戦いで敗北するまで、ケルト人とローマ人の小競り合いは続いた。他方でケルト人はパンノニア（ドナウ川中流域）に定住した。彼らはマケドニアなどを略奪して回り、紀元前279年にはデルフォイへ侵入し、劫略を試みた。しかし彼らは地震や嵐などによって大敗を喫し、敗残兵は散り散りになった。このような「移動からの帰還者」が、紀元前3世紀以降のケルト社会の形成に影響を与えたのである。

紀元前3世紀以降のウィンデリキアは、移動に参加せず居住しつづけた者たちの共同体と、外の世界から帰ってきた集団の新しい共同体が併存していた。後にこれら複数の居住地が次第に集約され、いくつかのオッピドゥムを形成するようになったのである。バイエルン地域の古代史研究者ハンス・ペーター・ウエンツ（Hans-Peter Uenze）は、バイエルン地域のケルト社会の都会化は「移動が終わった後の経済の統一の結果」とであると指摘する²。

「移動からの帰還者」の共同体と土着の共同体とが共存するという環境は、人々の精神的な面、とりわけ信仰生活にどのような影響を与えたのであろうか。この時代のケルト人の宗教についての史料は多くはないが³、ウィンデリキアを代表するオッピドゥムであるマンヒング（Manching）において、興味深い遺物が出土している。それが「崇拜の木（Kultbäumchen）」と呼ばれる、金箔でメッキを施された遺物である。

本稿は、この「崇拜の木」が紀元前3世紀のウィンデリキアのケルト社会に存在することの意味を、特に「ギリシアからの影響」という視点から考察する。「帰還者」の存在する状況がこの地域の宗教のかたちにもどのような影響を与えたのかを、ひとつの遺物の分析を通じて明らかにし、ケルト世界の宗教観が社会の仕組みや環境の影響を受け、地域ごとに差異を生み出すものであった可能性を見出したい。

1. マンヒングのオッピドゥムと「崇拜の木」

まず、本稿の舞台であるマンヒングのオッピドゥムについて説明しておこう。

マンヒングはドイツ南部バイエルン州、インゴルシュタット（Ingolstadt）から南へ8kmほど下ったところにある町で、現在では空港になっているところにかつてケルト



図2 マンヒング航空写真

(出典：Werner Krämer, Franz Schubert, *Die Ausgrabungen in Manching Band 1: 1955-1961 Einführung und Fundstellenübersicht*, Franz Steiner Verlag GMBH, Wiesbaden, 1970, Tafel.1.)

人のオッピドゥムがあった。遺跡の南西部をドナウ川の支流パール（Paar）川と接している東西2.3km、南北2.2kmの円形の石壁は、総延長約7 km、総面積380haである（図2）。

古代のインゴルシュタット地域はドナウ川を南北に渡る際の重要なポイントとなっていた。そのなかで、マンヒングにおける居住が始まったのは紀元前300年ころのことである。

移動に参加せず定住していた共同体の痕跡は、3か所の墓地によって確認できる。土葬墓のシュタインビーヘル（Schteinbichel）とフンツルツェン（Hundsrucken）、火葬墓ブランドグラブ（Brandgrab）である。これらの墓地は紀元前4世紀から紀元前2世紀にかけて使用された（単独の埋葬であるブランドグラブは紀元前300年以降のもの）。マンヒングの発掘者のひとりスザンヌ・ジーヴァース（Susanne Sievers）は、これらの3か所の墓地はそれぞれ別の共同体によって使われたものであり、「マンヒングのオッピドゥム」の共同体はこれらの複数の共同体が集まってできたものである

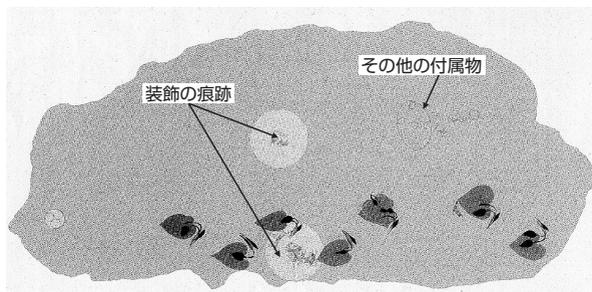


図3 「崇拜の木」などの出土状況

(出典：Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.“ in *Germania*, Bd.68, Nr.1, 1990, S.129-165, S.133, Abb.3.)

と述べる⁴。定住していた共同体と、おそらく東方や南方、西方へ行った傭兵⁵など新しい入植者の共同体がひとつになって、紀元前120年に囲壁が造られ、「マンヒングのオッピドゥム」は成立した。人口は5000から1万人であったと推測される。

その全貌は明らかになっていないながらも、1955年からドイツ考古学研究所ローマ・ゲルマン・コミッション (Deutsches Archäologisches Institut Römisch-Germanische Kommission) による発掘で、380haのうち25haの状況が明らかになっている。その結果、囲壁の西側に居住が集中しており、古くからの居住者と新しい植民者とが同じ空間に居住していたこと⁶、マンヒングが交通の要衝ないし文化伝播の中心として機能したこと⁷が明らかとなっている。

1984年10月30日、このマンヒングの発掘区画第859番 (縦108cm×横95cm、図1☆印) の1号縦穴の深さ3.5m地点から、金箔の貼られた複数の品物が出土した (図3)。そのうちのひとつは小さな樹木の形をしており、フェルディナント・マイアー (Ferdinand Maier) によって、「崇拜の木 (Kultbäumchen)」と呼ばれている。「崇拜の木」とその他の出土物の概要は以下のとおりである⁸。

1) 「崇拜の木」(図4)

「崇拜の木」は幹の高さ70cm、直径1.6cmの青銅の芯を持ち、薄い金箔を貼って作られている。幹からは長さ16.5cmの枝が伸び、9枚の葉と蕾と果実が付く。9枚の葉はハートの形をしており、厚さ0.2から0.3mmの青銅製である。垂れ下がった葉の下に蕾が飛び出たように描写され、葉、蕾、果実は3つ一組で、幹に6.5cmの間隔で取り付けられている。

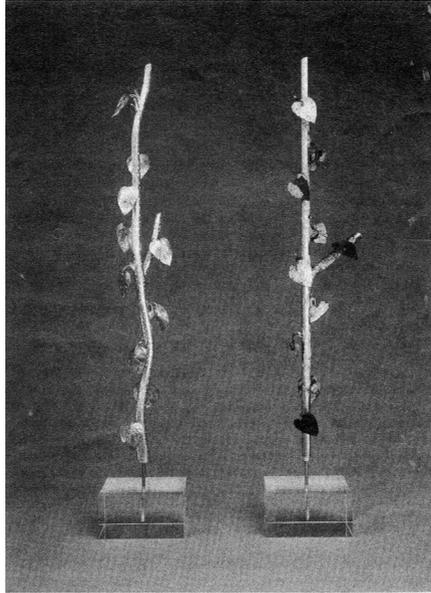


図4 「崇拝の木」(左は復元)

(出典：Ferdinand Maier, „Eiche und Efeu: Zu einer Rekonstruktion des Kultbäumchens von Manching,“ in *Germania*, Bd.79, Nr.2, S.297-307, S.299, Abb.1.)

「崇拝の木」の幹は厚さ0.01から0.06mmの金箔で覆われ、そこに環状の装飾が型押しされる。ハート型の葉、蕾、果実の茎も同じく金箔が貼られ、金箔の厚さは0.01から0.03mm。果実は長い楕円形で平たく、木製の核を有し、最も大きいもので長さ21.5mm、幅14.5mmである。葉の大きさは縦4.8cm、幅最大4.4cm、青銅の芯の厚さは0.2から0.3mmである。

2) 金箔の破片 (図5)

「崇拝の木」は同じように金箔を貼られた小箱に納められており、その小箱の金箔の残骸も同じ場所から出土している。金箔の破片は幅40cm、厚さ0.01から0.06mm。「崇拝の木」の金箔と同じように、直径約3.5mmの環の装飾が型押しされている。「トリスケル」と呼ばれるケルト美術において特徴的な3つひと組の環状の模様が施されている箇所もある。

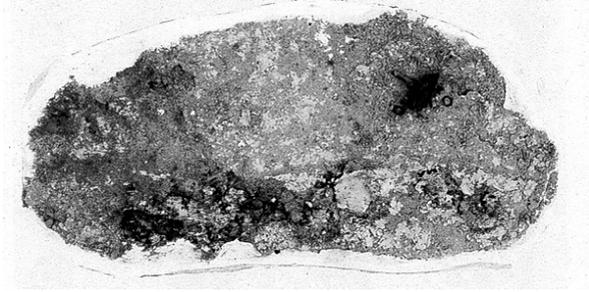


図5 金箔の破片

(出典：Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.“ S.134, Abb.4.)

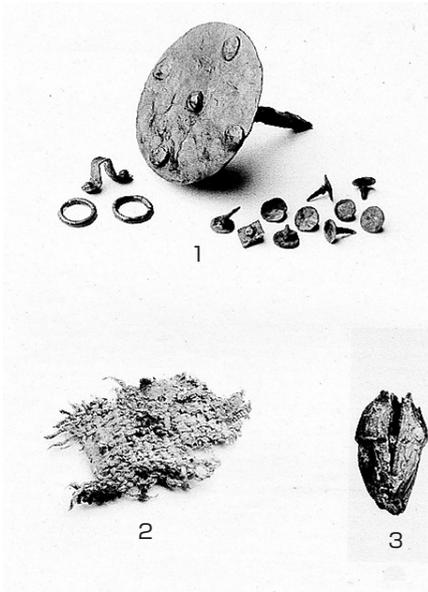


図6 その他の出土品

(出典：„Das Kultbäumchen von Manching.“ S.150, Abb.15.)

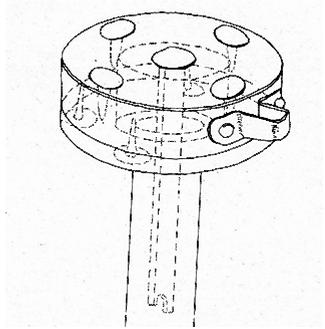


図7 「崇拜の木」の補助金具
(想像図)

(出典：„Das Kultbäumchen von Manching.“ S.152, Abb.17.)

3) その他の出土品 (図6)

細かな出土品として、鉄製のリベット (留め針) と青銅製のリング、青銅製の鉤金具、布の破片、木製の核が出土している。

鉄製のリベット (図6の1) は上部が円盤状になっており、画びょうのような形をしている。円盤は青銅で作られている。その直径は7.5cm、幅1mm、全体の長さは7.1cmで、針の先端は折れ曲がっている。円盤には直径6~8mmの小さな丸い金属がボタンのように5つ付いており、部品を結合させるネジのような役割をしたと考えられる。リングは2つ出土しており、太さ6.8mmの青銅の針金を直径18mmの大きさに丸くしたものである。青銅製の鉤金具は、金具部分の幅が2.5mmである。これらの鉄のリベットと青銅のリング、青銅の鉤金具は元々ひとつの部品だったようで (図7)、「崇拝の木」を用いる際に何か補助的な役割をする道具であったと考えられている。

布の破片 (図6の2) は長さ1.9cm、幅1.1cmで、「崇拝の木」を納めた小箱を縛る紐の一部であると推測される。木製の核 (図6の3) は「崇拝の木」の果実の芯にあたり、長さ1.2cm、幅最大0.7cmである。

以上が「崇拝の木」とそれに伴って出土した品々の概要である。この豪華絢爛で、ケルト世界においては稀有な「樹木をかたどった」芸術的作品の役割とは、いったい何だったのだろうか。

「崇拝の木」はその奇異さにも関わらず、現在のところ詳しい研究は少ない。現在ある4つの論考は、すべてマンヒングの発掘に携わったフェルディナント・マイアーによるものである。次章ではマイアーの4つの論文での考察を取り上げ、「崇拝の木」について彼が目にする3つの点を紹介したい。

2. Ferdinand Maier の注目点

1) 「技術的な源泉」としてのギリシア植民市

マイアーは「崇拝の木」の技術的な源泉を、イタリア半島南部に求める。古代、イタリア半島南部はマグナ・グラエキア (Magna Graecia) と呼ばれ、紀元前8世紀からギリシア人の植民市があった。「崇拝の木」に用いられた金メッキの技術はこのマグナ・グレキアで発展した金細工技術に影響を受けたものだと彼は主張した⁹。その根拠として彼が目にしたのが、マグナ・グラエキアのタラント (Tarent、旧名タレントゥム) で発展を見た金細工技術の存在である。彼によれば、タラントの墓地で副葬品として出土した金メッキの花冠に、「崇拝の木」との類似性が見られるという (図8、9)。

図8のタラントの花冠 (Corona) は、青銅に金箔を貼り付けて作られている。透かし彫りのされた長さ31.5cmのカチューシャのような頭飾りに、ハート型のキヅタの葉

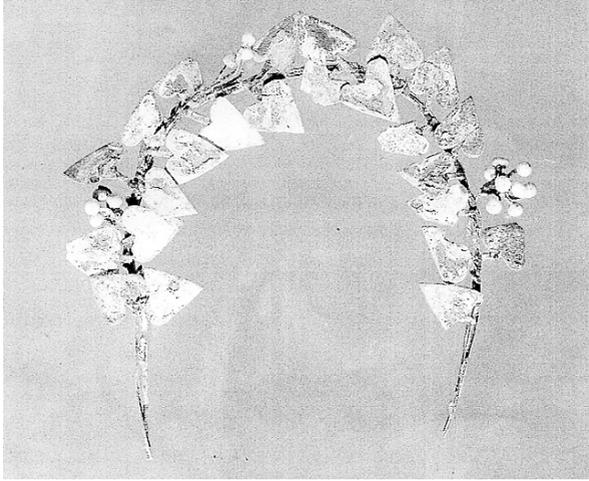


図8 タラントの花冠

(出典：Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ in *Germania*, Bd.76, Nr.1, 1998, S.177-216,, S.181, Abb.2.)

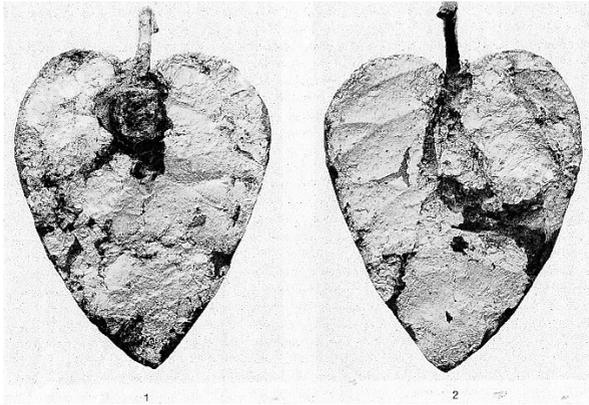


図9 「崇拝の木」の葉 (右は裏面)

(出典：„Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,“ S.142, Abb.8.)

と丸い果実が取り付けられたデザインである。

青銅（あるいは赤銅）に金箔を貼る技法は、紀元前4世紀後半から紀元前2世紀前半にかけてタラントの作業場で主流であった。紀元前3世紀後半からはメッキではなく、純金に装飾を施した花冠も作られたが、金箔でメッキされた花冠はそれと遜色ない見目で製作されつづけた¹⁰。芸術的な「ギリシア、マケドニア、アレクサンドリア、ステップ地帯の領域との関係の出発点¹¹」、すなわち金細工の技術や様式の源としてのタラントの花冠は、一方ではアレクサンドリアのシアトビー（Sciatbi）の冠に影響を与え、他方ではアルプスの北の「崇拝の木」に影響を与えたと、マイアーは推測している。

ただし、「崇拝の木」にはタラントの技術がそのまま適用されたわけではなかった。本来のタラントの花冠では、葉と果実と蕾は冠のカチューシャ部分に緩く取り付けられているだけだが、「崇拝の木」ではそれらは幹に「土着の鋳留め技術で」しっかりと留められており¹²、さらに幹の部分にはケルト世界独特のトリスケルが型押しされている。つまり、マイアーの言い方を借りるならば、金細工の技法という「ギリシア・地中海的要素」と、環状の装飾という「土着・ケルト的要素」が組み合わさっているのである。したがって、この芸術品がイタリアの技術やギリシアの装飾の概念に精通した人、それがギリシア人かケルト人かは分からないにしても、そのような人物の手によって作られたものであると、マイアーは指摘する¹³。

2) マンヒングのオッピドゥムにおける「崇拝の木」の重要性

以上のように、技術面における「崇拝の木」とタラントの花冠とのつながりは濃厚であるが、タラントの花冠の製造年代が「崇拝の木」よりも半世紀ほど遅いものであるにもかかわらずそのモデルとされている¹⁴ことには注意せねばならない。

マイアーは「崇拝の木」の製造年代を、幹に施された環状装飾の様式から、紀元前3世紀初期としている¹⁵。「崇拝の木」とその他の遺物の出土場所付近（図10）は、それが埋められていた縦穴を除いて、紀元前2世紀後半に用いられた。

マイアーは、「崇拝の木」は紀元前3世紀半ばから紀元前2世紀後半まで使用され、何らかのきっかけで使用されなくなったときに、縦穴に「意図的に」埋められたのではないかと推測している¹⁶。ともかく、「崇拝の木」が製作され、使用された年代が、移動からケルト人が「帰還」した時期とほぼ重なっていることは注目してよいだろう。

また「崇拝の木」がケルトの「樹木信仰」と関連するものであり、同じく出土したリベット、リング、鉤金具を取り付けることによって、儀式の際にその場の地面に突き立てられるか、あるいは持って歩かれる道具として機能したと彼は考える¹⁷。

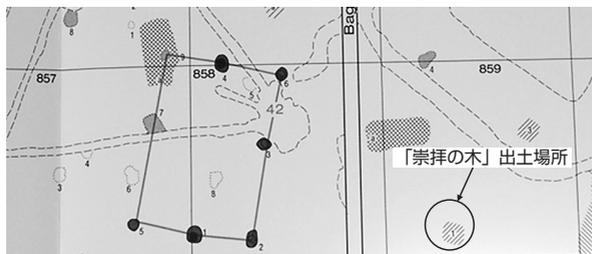


図10 「崇拝の木」出土場所とその周辺

(出典：Ferdinand Maier, Udo Geilenbruegge, Erwin Hahn, Heinz-Jürgen Köhler, Susanne Sievers, *Die Ausgrabungen in Manching Band 15: Ergebnisse der Ausgrabungen 1984-1987 in Manching*, Franz Steiner Verlag GMBH Wiesbaden, 1992, Beilage 3 より抜粋。)

3) 装飾の様式におけるギリシアの影響：「キツタ」のモチーフ

2001年の修復と復元¹⁸ (図4参照) によって、「崇拝の木」にあらわされたモチーフは、オークの木とそれに巻き付いたキツタの葉であることが明らかになった。

「キツタ」は本来、ギリシアの信仰において重要な意味を持っているものであった。ギリシアにおいて、ハート型や三又の形のキツタの葉は「ディオニュソスに関連すると解釈される」もの、ないしは紀元後1世紀のローマ人作家マルクス・アンナエウス・ルカヌスの記述においてはエロス神のアトリブートとされるものであり、それ自体が神聖なのではなく、「神の付属物」であるがゆえに重要視されていた¹⁹。

タラントの花冠は、埋葬の副葬品として製作されたものであり、そこにもキツタのモチーフがあしらわれている。「崇拝の木」にあしらわれたキツタの葉のモチーフは、技法的なモデルであるタラントの埋葬の花冠に表現されたキツタのモチーフを拝借した可能性が高い²⁰。そして、キツタはギリシア世界においてはディオニュソス神と結び付くものであり、とくにイタリア半島においては埋葬と関連付けられるものであった。

マイアーは、「崇拝の木」に様式や技法の面で、イタリア半島のギリシア世界からの強い影響があったとし、この作品の製作者は、タラントの様式におけるキツタの意味を知っていたかもしれないと主張する²¹。

しかし、「崇拝の木」が具体的にどのような宗教的な意味を持っていたのか、その意味のなかにギリシアの影響があったとするならばそれはどのようなものかについては、マイアーはあまり触れていない。技法や様式など、外観上これだけギリシアの影響が確認されるのであれば、「崇拝の木」が利用される状況、すなわち宗教においてもギリシアからの影響が少なからずあったと考えることは、自然なことではないだろう

か。

次章では「崇拝の木」にあしらわれたモチーフ、「オーク」と「キヅタ」の宗教的な意味の分析を行ない、この時代、紀元前3世紀のウィンデリキア地域におけるケルト人の宗教観について、より詳しく考察を続けたい。

3. 「崇拝の木」の神聖性 ―ケルト的側面とギリシア的側面―

「崇拝の木」のモチーフであるキヅタの巻き付いたオークの木、この「オーク」と「キヅタ」という2つの植物が持つ宗教上の意味は何だろうか。以下では古典文献や図像史料の考察から、その意味を繙いていきたい。用いる研究はケルトの宗教美術や装飾の意味に関するものである²²。

本題に入る前に、「崇拝の木」の役割についての確認を行う必要がある。マイアーは「崇拝の木」を「樹木信仰」に関係する道具であるとしており、筆者もその見解に則って本章での議論を進める。けれども、「崇拝の木」が本当に「樹木信仰のための道具」であったのかを証明することはできない。考古学的な調査からは、ケルトの宗教において樹木がどれほどの位置を占めていたかを明確にすることは難しい。

古典文献においては、樹木はケルトの宗教において重要な位置を占めるものだとみなされた。ケルトの聖職者「ドルイド」やその信奉者は木立や森を好み、そのような暗く、鬱蒼とした場所に籠り、残酷な神に対して生贄を捧げるのだと、ルカヌスは『内乱記』のなかで述べる²³。

しかしながら、このような木立や森林とドルイドとの関連付けは、すべて紀元後1世紀以降のローマ人作家による過剰な強調が原因であるとして、近年ではあまり重要視されることはない。ケルトと森林の関連付けに否定的な見解を示す研究者のひとり、ジェーン・ウェブスター (Jane Webster) は、紀元後1世紀に「ドルイド」と「森」とが強く結び付けられたのは、ローマによる征服後に、皇帝によって迫害されたドルイドやドルイディズムの信奉者が都市部から追いやられ、森の奥深くなど人目のつかない場所に移動し、儀式のあり方が変化した結果に過ぎないと指摘する²⁴。

ケルトの宗教における樹木の重要性は、古典文献で述べられているほどのものではなかったと考えるのが妥当であろう。けれども、バーデン・ヴェルテンベルクのフェルバッハ・シュミーデン (Fellbach-Schmidlen) の四辺形の遺構 (方形土塁 Viereckschanze²⁵) で木製の彫像が出土していることから、樹木がケルト世界においてある程度神聖な役割を担うに値したことは、確かなことだと思われる。「崇拝の木」もそのような、神聖視されるもののひとつであった可能性がある。

以上のことを踏まえたうえで、「崇拝の木」のモチーフである「オーク」と「キヅタ」

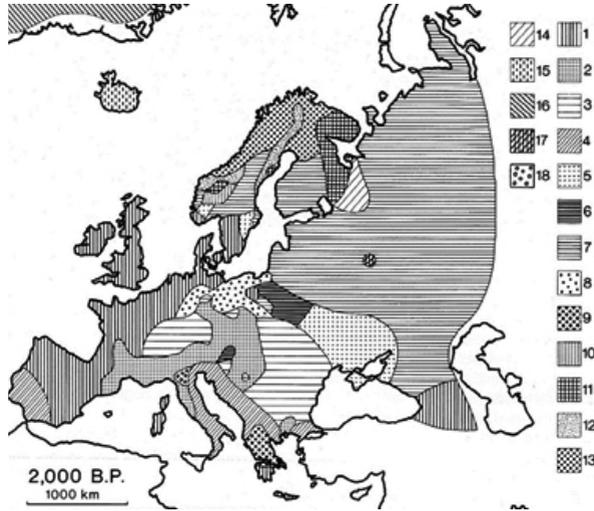


図11 古代ヨーロッパの植生

(出典：Martin Bell, "People and nature in the Celtic world," in Miranda J. Green (ed.), *The Celtic world*, Routledge, London, 1995, pp.145-158. p.148, Fig.9.1.)

- 1…ハシバミ、オーク、ハンノキ 2…オーク、ブナ、アカザ 3…ブナ、トウヒ、シデ
 4…オーク、マツ、ブナ 5…ハシバミ、オーク、ニレ 6…マツ、アカザ
 7…トウヒ、マツ、カバノキ、ハンノキ 8…オーク、ハシバミ、牧草
 9…オーク、アカザ、Ostrya (カバノキ科の植物) 10…マツ、カバノキ、アカザ、オーク
 11…トウヒ、マツ、カバノキ 12…マツ、カバノキ、ハンノキ
 13…カバノキ、マツ、ハンノキ 14…マツ、カバノキ 15…カバノキ、ヤナギ、ネズ、ヒース
 16…大氷原 17…トウヒ、セイヨウボダイジュ、ニレ、カバノキ 18…マツ、ブナ、硬葉植物群

の宗教的意味を考えていきたい。

1) オーク²⁶

オークはケルト世界全体で一般的に自生する樹木であり(図11)、ケルト人の生活に密着したものであった。木そのものは丈夫なために建材として用いられ、果実であるドングリは冬の間の食糧や家畜の餌となり、樹皮は染料や薬となった。

このようにケルト人にとって身近であり、汎用性の高かったオークは、「神聖な樹木」ともみなされたようである。プリニウスの『博物誌』においてオークと関連付けられたのが、ケルトの聖職者「ドルイド」とその儀式である。プリニウスによると、ドルイドはヤドリギに寄生されたオーク(カシ)の木を殊の外うやまい、恭しくそのヤドリギを切り落とし、そしてオークの木の前で牡牛を屠ったという²⁷。「カシの木に宿っ

ているものはすべて天から送られたもの」であり²⁸、神から与えられた霊力が宿っていると考えられたからである。オークに宿っていた霊力とは、その樹皮が実際に薬として使われたことから分かるように、「癒し」の力であった。

また、ケルト語の研究者ザビーネ・ハインツ (Sabine Heinz) は、ケルトの装飾という視点から、オークの持つ意味を次のように指摘する。すなわち、オークの果実であるドングリは生で食されるときには、食した者に意識の変調をもたらした。そのようなオークは「知識を獲得し、情報を得、鼓舞させ、現実逃避させ、勇気と自己認識を得ることを助ける²⁹」意味を持った。ハインツの指摘によるならば、オークの木は「癒し」のほかに、「陶酔」の力も有していたと考えられる。ケルト人にとってオークは、浮世離れの感覚や、癒しの力を与えるものと信じられていた。以上のことから、「崇拜の木」にあらわされたオークが、ケルトの信仰において重要な樹木であり、その意味は「陶酔」や「癒し」などであった可能性があることが分かる。

しかしながら、オークにそのような「癒し」や「陶酔」の霊力を与えた存在 (すなわち神) が何であったかについては分かっていないのが現状である。ケルト世界において、オークの木と何かしらの神性との関連付けが確認されるようになるのは紀元後1世紀、ローマ支配下に入ってからのことである。その役割を担ったひとつの要因は、ローマの雷神でオークを聖木とするユピテル神であった。

紀元後1世紀以降、ガリアの一部やライン川周辺、属州ラエティア西部において「ユピテルの巨大柱 (Jupitergigantensäulen)」と呼ばれるものが多く造られるようになった。「ユピテルの巨大柱」は、その頂上に馬に乗り、外套をまとい雷を振り上げるユピテル神の像が置かれ、柱本体には鱗模様やブドウの蔓の模様、そしてオークの葉の模様が刻まれる。またその台座の4面にそれぞれユノ神、メルクリウス神、ヘラクレス神、ミネルヴァ神が描かれた (図12)。

イタリア半島ではほとんど知られていないこの巨大な柱の芸術については、ケルトやゲルマンの宗教の研究者ローランド・グシュリュースル (Roland Gschlössl) による考察がある。彼によると、これらの巨大柱は現地の土着の信仰の伝統、つまりケルトやゲルマンのそれらがローマの宗教に融合してできたこの土地独自のものであった。

さらにグシュリュースルは、ここにはケルト土着の神、タラニス神も糾合されているという³⁰。タラニス神はケルトの雷神、ないし戦争の神で、ルカヌスの『内乱記』においては「スキュティアのディアナと同じくらい慈悲のない」神とされる³¹。この神は馬の頭などが象徴とされ、ケルト人部族の金貨にもその姿が描かれているのが確認される³²ものの、本来オークとは関係がなかったようである。けれどもその後、ローマによる支配下において、「雷神」という共通の要素がタラニス神をユピテル神と結び



図12 ユピテルの巨大柱

(出典：Roland Gschlöbl, *Im Schmelztiegel der Religionen: Göttertausch bei Kelten, Römern und Germanen*, Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 2006, S.41.)

付け、その延長としてタラニス神とオークが結び付き、結果オークが雷の属性を付与されることになった。つまり、それまで明確な神性を有さなかったケルトの「オーク」が、ユピテル神の仲介によって初めて1つの神性と結び付いたのである。

したがって、「崇拜の木」が製作された当時においては、オークの木は特定の神性と結び付くものではなかった可能性が高い。とはいえ、その後オークに払われた敬意からは、すでにケルト人たちにとって、木そのものとして神聖な存在とみなされていたことは、十分に考えられる。

2) キヅタ

元来キヅタとは、ケルト世界において神聖性を強調される存在ではなかった³³。けれども、「タラントの花冠」との結び付きから、この植物が描かれたと考えられる。

「タラントの花冠」にはキヅタの葉があしらわれ、そのキヅタはギリシア世界においてディオニュソス信仰と関連付けられるものであった³⁴。ゆえに「崇拜の木」のキ

ヅタも、同じようにディオニュソス信仰と関連する可能性が出てくる。そこで以下ではこのディオニュソス信仰の意義に重点を置いて議論を進めていく。

バックスとも呼ばれるディオニュソスは、ギリシアの葡萄酒、植物、豊饒、演劇の守護神などとされ、その信仰においてキヅタやブドウがアトリブートとされる。

ディオニュソス信仰とその信者については、紀元前5世紀のギリシアの作家エウリピデースの悲劇『バッカイ』に記述がある。彼はそのなかでバッカイ（ディオニュソス信者）たちの姿を次のように描いている。

セメレーを育んだターバイよ、
木ヅタの蔓で 頭を飾れ。
はじけんばかりに 精気をみなぎらしめよ、
美しい実をつける 常緑のミーラックス [サルトリイバラ] で。
樅の枝や 樅の枝をかざして
バックスの力に支配されよ。

斑の子鹿の皮を身にまとい、
白い羊毛を縫り、房で飾った帯を締めろ。しかし
暴力を宿すウイキョウの杖を扱うにあたっては 謙虚であれ。・・・³⁵

もうひとつ、ディオニュソス崇拝に関する記述としてアテナイオスの『食卓の賢人たち』の、プトレマイオス王朝でのディオニュソス崇拝の儀式に関する一節がある。

ディオニュソスの祭りの行列では、行列の先頭を行って、群衆が飛び出してこないように制止するのはシレノスたちで、紫あるいは赤紫の短外套（クラミュス）を羽織っている。この次に続くのはサテュロスたち。競技場の各隅に二〇人ずつで、金のきづたの葉で飾った松明を持っている。そのあとが金の翼をつけた勝利の女神たち。この女神たちは、金でこしらえたきづたの葉で飾られた、長さ六ペキュス [約二、六メートル] に及ぶ香炉を持っている。・・・³⁶

エウリピデースが描くのは一部のディオニュソス信者の姿であり、彼らの全員がこのような状況であったわけではない。けれども、この描写からは、ディオニュソスに幻惑された人々が色々な植物を身にまとって、その力に支配されたことがうかがえる。またアテナイオスの記述においても、ディオニュソスの祭典行列において金のキヅタが重要な装飾品となっていたことが分かる。キヅタの蔓で編んだ冠などを身に着ける

ことは、ディオニュソス信者のあかしのひとつであったと考えられる。ディオニュソスとキツタは強く結び付いていた。

キツタを頭に巻き付けたディオニュソスの信者たちは、憑依状態におちいって、常軌を逸した行動にふけたという。『バックイ』には、ディオニュソスに魅了された女が実の息子を生きたまま八つ裂きにするという惨たらしい描写がある。実際には八つ裂きはできないにしても、信者たちは大酒を飲み、性的な行為を含む乱痴気騒ぎを繰り広げたと考えられる。ディオニュソス研究の大家アンリ・ジャンメール (Henri Jeanmaire) は、この神への信仰を「肉体の興奮状態の中に喜びを求めることを目指す」宗教と表現する³⁷。

奔放で活力にあふれ、そしてしばしば気狂いを引き起こす神の象徴として、キツタの蔓とその葉が選ばれた。キツタは常にその葉が青く、繁茂し、上へ上へと延びていく。それは「強い生命力」や「活力の漲り」を象徴するものであった³⁸。

ところが、イタリア半島では事情が少し変化する。ギリシア本土では精力漲る存在のディオニュソスであったが、マグナ・グレキアではディオニュソスがペルセポネやハデスなど冥界の神と同じく、墓地においてこの神の象徴が見られた³⁹。「崇拜の木」のモデルとなったタラントの花冠も、埋葬と関係する。もし「崇拜の木」のキツタがマグナ・グレキアのディオニュソス信仰との関連性を有するのであれば、そのキツタは埋葬における意味を有していたはずである。「死」において「キツタ」と「ディオニュソス」が意味することとは、いったい何だろうか。

キツタ以外のディオニュソスの象徴に目を向けると、その意味が明確になってくる。ここでは、ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン (Johan Jacob Bachofen) の研究にしたがって、イタリアにあるヴィッラ・パンフィーリの墳墓絵画 (図13) におけるディオニュソス関連の図案の意味を見ていきたい。

ヴィッラ・パンフィーリの墳墓絵画は紀元前1世紀後半に描かれたとされる。図13では、若者5人が座っている中心のテーブルの上 (図13○印) に、3つの卵が置かれている。この「卵」は、バハオーフェンによれば、埋葬と関連するディオニュソス信仰の象徴であった。

卵は1個のなかで白と黒の2色に塗り分けられている。この色分けは単純に、白は「生」、黒は「死」を表わすものとされる。あるいは白は「霊魂がより高次の状態へ移行するため」の肉体の消滅の際に身につけられる色ともされ、「清祓」としての意味も持つ⁴⁰。1個で2つの相反する色を有するディオニュソスの「卵」は、生と死の両方を兼ね備え、「死から生への永遠の転変」を象徴し、「生と死をその内に含み、両者を分かちがたく統一」するものであった⁴¹。「死から生への永遠の転変」とは、すなわち「転

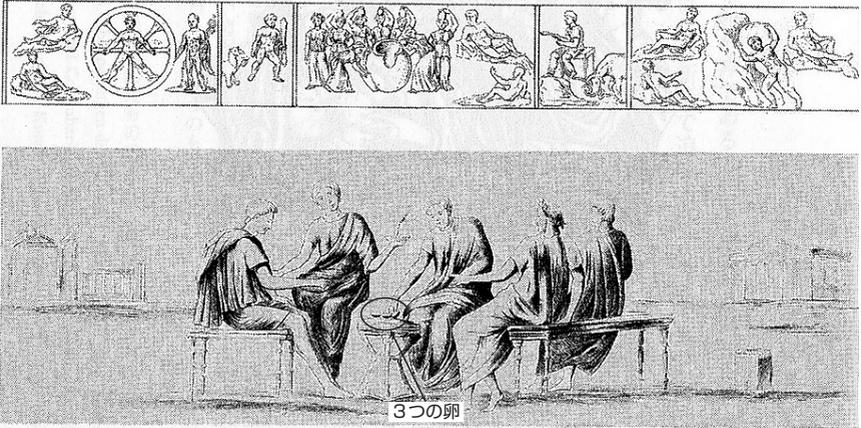


図13 ヴィッラ・パンフィーリの墳墓絵画

(出典：ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン（平田公夫，吉原達也訳），『古代墳墓象徴試論』，作品社，2004年，611頁。）

生」である。

さらに、「卵」に関してはもうひとつの意味が挙げられている。オルベウス・バックス教において、卵は「すべての生命を自ら光のもとへ生み出す事物の物質的な始源」であり、一心同体のものとしての「生」と「死」を表わすものでもあった⁴²。つまり、「死」や「埋葬」と関連付けられるディオニュソスは、全てを生み、生み落とした全てを再び自らのなかに取り込む万物の母のようなものとして、その女性的な側面が強調されるのである。

卵以外のディオニュソスと関連する象徴も、同じような意味を有した。ヴィッラ・パンフィーリの墳墓に描かれたものとして、「ミュルテ（ギンバイカ）の冠」がある。ミュルテの冠もディオニュソス信仰の秘儀参入のしるしのひとつであると同時に、「すべての大地の被造物の原母たるアプロディテ・ウェヌス」への捧げものであると、バハオーフェンは主張する⁴³。

アプロディテ・ウェヌス＝全ての母への捧げものを秘儀参入のあかしとしていることは、その信仰が結果的に男性的＝授精的なディオニュソスをその内に秘めている「母なるもの」への礼讃を目的としていることを示す。そして「母なるもの」は生むことと死を永遠に繰り返すのである。

バハオーフェンの主張を考慮すると、以上のような背景を持つがゆえに、埋葬や死者崇拜においては、ディオニュソスそのものや信仰、その象徴は女性的な側面が強調

され、そのなかでは女性的な生産や受胎、再生の意味を有していたといえる。時代は異なるが、同じように埋葬の脈絡で製作された「タラントの花冠」に描かれたキツタも、ディオニュソスが有した女性的な「再生」、あるいは「転生」という意味合いを有していた可能性が高い。

以上のことを踏まえると、「タラントの花冠」をモデルとした「崇拜の木」のキツタは、ディオニュソス信仰における元々の意味である「活力」や「繁栄」のほかに、死者崇拜の脈絡でディオニュソス信仰が強調する「再生」の意味も有していた可能性がある。

おわりに

イタリア半島のギリシア世界に影響を受けたマンヒングの「崇拜の木」は、金メッキの技術面だけでなく、その宗教上の意味においても「ケルト」と「ギリシア」という2つの世界の思想の混交が見られる存在であった可能性がある。それはすなわち、芯であるオークの持つケルト的な「癒し」、あるいは「陶酔」の力と、それに絡み付いたキツタの持つディオニュソス信仰の脈絡での「活力」あるいは「繁栄」、そしてタラントなどにおいて強調される「再生」の意味合いの融合が起こっていたということである。

ところで、プリニウスが記しているように、ケルト世界においてオークに宿るものとしてこのほか崇められるのが、「ヤドリギ」である。ケルト的ではない「キツタ」が「オーク」に絡み付くことは、ケルト的であると考えられる「ヤドリギ」がそれに寄生することと、どのような違いを生むのであろうか。

ヤドリギは寄生した木が葉を落とした後も常にその緑色を保ち、その樹液が持つと信じられていた薬用効果から、多産のための万能薬であるとも考えられていた⁴⁴。「繁殖」や「多産」をもたらすためのヤドリギと、「再生」あるいは「復活」を意味するキツタ。この2つの意味合いは似ているようだが、キツタを絡み付かせることによって、棺桶として使用されることもあったオークの「死者崇拜的な側面」を、よりいっそう際立たせていると考えることができる。

資料の制約などもあり、現状では説得力を持つ議論をこれ以上展開することはあまり望めない。「崇拜の木」に表現されたモチーフだけで、ウィンデリキアのケルトの宗教がギリシアのそれと結び付きを持っていたと結論付けることは無理である。けれども、「崇拜の木」がこの時代のウィンデリキア地域の信仰生活において重要な意味を持っていたこと、そして、それを唯一所有していたマンヒングという場所が、その信仰生活において重要な地であったことは、確実なことであるように思われる。

マンヒングのオッピドゥムがウィンデリキアの「信仰的な中心地」であったならば、なぜマンヒングがそうなり得たのだろうか。マンヒングとウィンデリキアの他の場所との関わりなど、ウィンデリキア全体の視点から考察を深めることが必要となる。今後の課題としたい。そしてウィンデリキア全体の宗教の有り様が明らかになって初めて、「崇拜の木」がケルトとギリシアの宗教的融合の結果の産物であることが確実になると考えている。

〈註〉

- 1 ボンベイウス・トログス（合阪學訳）、『ユニアヌス・ユスティヌス抄録 地中海世界史』、(京都大学学術出版会、1998年)、311-321頁；ポリュビオス（城江良和訳）『歴史 I』、(京都大学学術出版会、2004年)、148-173頁；リウィウス（毛利昌訳）、『ローマ建国以来の歴史 3』、(京都大学学術出版会、2008年)、114-152頁参照。
- 2 Hans-Peter Uenze, “Bavaria,” in Venceslas Kruta et. al. (eds.), *The Celts*, (Rizzoli, New York, 1999), pp.288-293, p.291.
- 3 ケルトの宗教に関する美術品はガロ・ローマ文化の遺物として出土し、紀元後に年代付けられるものが多い。紀元前に年代付けられるケルト宗教に関連する遺物は、フランス南部プロヴァンスのアントルモン (Entremont) やロックペルチューズ (Roquepertuse) の石造りの彫像、あるいはドイツ西部コブレンツ近郊のプファルツフェルト (Pfaltzfeld) の石柱などが挙げられる。Miranda Green, *Celtic Art: Reading the Messages*, (Calmann & King Ltd, London, 1996) 参照。
- 4 Susanne Sievers, *Manching: Die Keltenstadt*, (Konrad Theiss Verlag GmbH, Stuttgart, 2003), S.26-27.
- 5 *Ebd.*, S.24.
- 6 Herbert Lorenz, Hermann Gerdson, *Die Ausgrabungen in Manching Band 16: Chorologische Untersuchungen in dem Spätkeltischen Oppidum bei Manching am Beispiel der Grabungsflächen der Jahre 1965-1967 und 1971: Fundstellenübersicht der Grabungsjahre 1961-1974*, (Franz Steiner Verlag Stuttgart, 2004), S.37.
- 7 ルパート・ゲプハルト (Rupert Gebhard) らによる、マンヒングとボヘミア、バーデン・ヴェルテンベルク、ベルヒンク・ボランテンでそれぞれ出土した陶片分析の結果、たとえ同じような見た目であっても、ミクロレベルでは焼成の時間などに地域ごとで差異があることが分かった。ゲプハルトは、ある場所でその場所のものとは違う製法の陶器が発見されていることは、大きな都市を中心とした地域的な交易のつながりがあったことを示していると述べる。また R. D. ボット (R.D. Bott) らのマンヒングとボヘミア出土の陶器の分析では、他地域での同じ製法の陶片の出土は交易の結果ではなく技術伝播の結果であると結論付ける。ある地域にいる高い技術力を持った職人による装飾、様式、外見が模倣され、その場所以外でも広まっ

- たというのがボットの主張である。Rupert Gebhard et. al., “Ceramics from the Celtic Oppidum of Manching and its influence in Central Europe,” in *Hyperfine Interactions*, 154, 2004, pp.199-214, pp. 202-204, p.212; R.D. Bott et. al., “The oppidum of Manching,” in *Naturwissenschaften*, 81, 1994, pp. 560-562, p.562 参照。
- 8 「崇拜の木」とその他の出土物の概要はすべて Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,” in *Germania*, Bd.68, Nr.1, 1990, S.129-165, S.139-152 に依拠。
 - 9 Ebd., S.154-155.
 - 10 Ebd., S.186.
 - 11 Ebd., S.187.
 - 12 Ebd., S.188.
 - 13 Ferdinand Maier, „Der Goldfund von 1984,“ in Ferdinand Maier, Udo Geilenbruegge, Erwin Hahn, Heinz-Jürgen Köhler, Susanne Sievers, *Die Ausgrabungen in Manching Band 15: Ergebnisse der Ausgrabungen 1984-1987 in Manching*, (Franz Steiner Verlag GmbH Wiesbaden, 1992), S.336-339, S.336-337.
 - 14 Ferdinand Maier, mit Beiträgen von Christoph J. Raub, Rupert Gebhard, Johann Koller und Ursula Baumer, „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ in *Germania*, Bd.76, Nr.1, 1998, S.177-216, S.181-182.
 - 15 Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,” S.161-162.
 - 16 Ferdinand Maier, „Der Goldfund von 1984,“ S.356.
 - 17 Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ S.188.
 - 18 「崇拜の木」の修復と復元については、Constanze Thomas, „Kultbäumchen des keltischen Oppidum von Manching: Neurestaurierung und Rekonstruktion,“ in *Restauvo: Zeitschrift für Kunsttechniken, Restaurierung und Museumsfragen*, Bd.107, Nr.6, 2001, S.460-463 も参照のこと。
 - 19 Ferdinand Maier, „Eiche und Efeu: Zu einer Rekonstruktion des Kultbäumchens von Manching,“ in *Germania*, Bd.79, Nr.2, S.297-307, S.300-301.
 - 20 Ferdinand Maier et. al., „Manching und Tarent: Zur Vergoldungstechnik des keltischen Kultbäumchens und hellenistischer Blattkränze,“ S.186-188.
 - 21 Ebd., S.189.
 - 22 本稿で取り上げられなかったケルト宗教、およびケルト美術の研究としてはヴァンセスラス・クルータ (Venceslas Kruta) やヴィンセントおよびルース・ミゴー (Vincent and Ruth Megaw) の研究がある。Ruth and Vincent Megaw, „The nature and function of Celtic art,“ in Miranda J. Green (ed.), *The celtic world* (London, 1995), pp.345-375; Venceslas Kruta, “Celtic religion,” in V.

- Kruta et. al., *The Celts*, (New York, 1999), pp.533-541 など参照。
- 23 マルクス・アンナエウス・ルカス 『内乱記』445-446より。Lucan (trans. James Duff Duff), *The civil war* (William Heinemann LTD, London, 1925, rep. 1988), pp.34-37.
- 24 Jane Webster, “Sanctuaries and sacred places,” in Green, Miranda J. (ed.), *The celtic world*, (Routledge, London, 1995), pp.445-464, p.448 参照。
- 25 フランスからボヘミアまで至る広範な領域、とくにドイツ南西部、南部に集中して存在する紀元前2世紀ころの構造物。1975年、クラウス・シュヴァルツ (Klaus Schwarz) によってケルト人の聖域であると定義づけられたが、近年の発掘調査の進展によって否定的な意見も出てきており、その役割ははっきりとはしていない。方形土塁については Klaus Schwarz, „Die Geschichte eines Keltischen Temenos im nördlichen Alpenvorland,“ in *Ausgrabungen in Deutschland: gefördert von der deutschen Forschungsgemeinschaft, 1950-1975*, (Römisch-Germanisches Zentralmuseum, Forschungsinstitut für Vor- und Frühgeschichte, T. 1., 1975), S.324-358; Kurt Bittel, Siegwalt Schiek, Dieter Müller, *Die Keltischen Viereckschanzen: Band. 1 Text*, (Kommissionverlag Konrad Theiss, Stuttgart, 1990); Günther Wieland (Hrsg.), *Keltische Viereckschanzen: einem Rätsel auf der Spur*, (Theiss, Stuttgart, 1999); Jean-Louis Brunaux (trans. Daphne Nash), *The Celtic Gauls: gods, rites and sanctuaries*, (Seaby, London, 1988); Mathew Murray, “Viereckschanze and feasting: Socio-Political Ritual in Iron-Age Central Europe,” in *Journal of European Archaeology*, Volume 3, Number 2, 1995, pp.125-151 などを参照。
- 26 本稿での「オーク」とはドイツ語の Eiche や英語の Oak の訳であり、「ブナ科ナラ属の木の総称」を意味する。それは本来ならばカシワの木やナラの木を指すものであって厳密にはカシワの木のことではないが、ケルトに関する文献では Oak = カシと訳されていることが多いため、本稿でもそれに則り「カシ」も含んだ意味として「オーク」と表す。
- 27 プリニウス『博物誌』16巻95:249より。中野定雄他訳、『プリニウスの博物誌 第Ⅱ巻』, (1986年, 雄山閣), 704頁。
- 28 同上。
- 29 Sabine Heinz, *Celtic Symbols*, (Sterling, New York, 2008), pp.146-147.
- 30 Roland Gschlößl, *Im Schmelztiegel der Religionen: Göttertausch bei Kelten, Römern und Germanen*, (Verlag Philipp von Zabern, Mainz am Rhein, 2006), S.41-46.
- 31 Lucan (trans. James Duff Duff), *The civil war* (William Heinemann LTD, London, 1925, rep. 1988), pp.34-37.
- 32 ケルトの神は多種多様な役割を担っていたため、ローマのひとつの神性と同定することはできない。Jean-Jacques Hatt, „Die keltische Götterwelt und ihre bildliche Darstellung in vorrömischer Zeit,“ in Pauli, Ludwig, Bonnamour, Louis et. al., *Die Kelten in Mitteleuropa: Kultur, Kunst, Wirtschaft: Salzburger Landesausstellung 1. Mai-30. Sept. 1980 im Keltenmuseum Hallein Österreich*, (Amt der Salzburger Landesregierung, Kulturabteilung, Salzburg, 1980), S.52-67, S.55 参照。

- 33 ケルトに関係するもので「キヅタ」の神聖性が描かれているのは、「崇拜の木」のほかには、「ゴネストルップ (Gundestrup) の大釜」のみである。「ゴネストルップの大釜」は1891年にデンマークで発見された器。ケルト的な兵士や鹿の角を持つ神ケルヌンノスなどの図像と、オリエント的なグリフォンなどの図像が打ち出し技法で施されている。
- 34 Ferdinand Maier, „Das Kultbäumchen von Manching: Ein Zeugnis hellenistischer und keltischer Goldschmiedekunst aus dem 3. Jahrhundert v. Chr.,“ S.154-155.
- 35 エウリピデース『バッカイ』, 第2ストロフェー 105-113より。逸身喜一郎訳, 『バッカイ: バッコスに憑かれた女たち』, (岩波書店, 2013年), 32-33頁 (□内は筆者)。
- 36 アテナイオス『食卓の賢人たち』, 第5巻197より。柳沼重剛訳, 『食卓の賢人たち 2』, (京都大学学術出版会, 1998年), 224頁。
- 37 アンリ・ジャンメール (小林真紀子, 福田素子, 松村一男, 前田寿彦訳), 『ディオニュソース バッコス崇拜の歴史』, (言叢社, 1991年), 588頁。
- 38 エウリピデース (逸身喜一郎訳), 『バッカイ: バッコスに憑かれた女たち』, 183頁。
- 39 アンリ・ジャンメール『ディオニュソース バッコス崇拜の歴史』, 597頁。
- 40 ヨハン・ヤーコプ・バハオーフェン (平田公夫, 吉原達也訳), 『古代墳墓象徴試論』, (作品社, 2004年), 23頁。
- 41 同24頁。
- 42 同29頁。
- 43 同46頁。
- 44 木村正俊, 『ケルト人の歴史と文化』, (原書房, 2012年), 143-144, 158-159頁。